Tasia Matthews

<日本語仮訳>

前進のために過去を振り返る：核兵器のない未来に向けて

私たちの未来を描くためには、過去を振り返ることが重要である。

核兵器の存在は、人間の精神力と科学の発達の証明であり、人間の精神と知性をあらわす物理的な偉業である。しかし、核兵器は何百万もの人々に甚大な被害と悲劇をもたらし、その影響は、技術革新の名の下にある閾値を超えることがマイナスの結末を招きかねないことを私たちに思い起こさせている。

そのような結末の一つが、核兵器の実験や配備がもたらす人々への悪影響である。米国は核実験を始める上で、ワシントン州やニューメキシコ州などの核実験場に所在していた先住民のコミュニティを追い出した。核実験が完了した後も、環境汚染は（これらは現在も続いている）その土地に戻ってきた人々だけでなく、続く世代や周辺の土地の健康に甚大な影響を与えた。これらのコミュニティにとっての正義はどこにあるのだろうか？自然にとっての正義はどこにあるのだろうか？

ニック・ボストロムが唱える「脆弱な世界（The Vulnerable World）」説は、いずれ人類は、地球をただひたすらに破壊し、場合によっては消滅させるほどの強力な兵器を発明するかもしれないというものだ。この仮説によれば、人間の創造性は、それが人類にとって良いもの（白球に例えられる）であれ、有害なもの（灰色球に例えられる）であれ、無限に近い数の発明を生み出すことができる。ボストロムは、私たちはまだ「黒い球」、つまり文明を破壊するほど危険で強力なものに遭遇していないと主張している[1]。核兵器による長期的な被害で明らかなように、私たちはすでにこの危機に瀕している。このまま技術革新への道を突き進めば、さらに悪いものを生み出してしまうかもしれない。そうした結末は何としても避けなければならない。

2023 年 7 月公開の超大作映画『オッペンハイマー』において、ハリー・S・トルーマン大統領は、大統領として「彼だけが」原爆使用の責任を負うと主人公に語る。しかし実際は、オッペンハイマーも含め、多くの人々が原爆の製造と配備に協力した。そのうちの何人が、原爆投下を実行に移すべきかどうか、途中で自問自答しただろうか。何人が周囲の人々を止めようとしただろうか？何人が無視されたのだろうか？

この視点を広げてみれば、すべての人、つまり私たち全員が、何らかの形で、このような原

[1] Bostrom, N. (2019). The Vulnerable World Hypothesis. *Global Policy*, 10(4).

爆投下の責任を負っていることが理解できるだろう。戦争に行くという決断、壮大な結果をもたらす政策を実行しようと躍起になっている政治家を支持するという判断、あるいは自分たちの方が優れているという誤った信念から、現在の地政学で起こっていることを無視して説明責任を果たさないという判断。私たちの誰もが、こうした判断を下す力を持っている。これらはすべて、核兵器の使用と拡散に貢献するものである。したがって、核兵器は私たちの共通の責任であると考えなければならない。

各国政府は、核兵器は自国の安全保障のために不可欠であり、敵対国が核兵器を持っている以上、予防措置として同じことをしなければならないと言って、核兵器保有を正当化する。こうした発言は理解できる。自己防衛と不信感から生まれたものだ。歴史や考え方はさまざまだが、このような信頼の欠如は危険であるというのが現実である。核兵器の保有は技術革新を正当化する。核兵器保有を使って国際的な協力を強要することは、軍拡競争の激化を正当化し、最終的には誰かが核攻撃という取り返しのつかない決断を下すことに繋がる。その代わりとして、私たちは信頼を促進する解決策をどこまで模索すべきであろうか？ それとも、私たちは完全な破滅に向かってこの綱渡りを常時し続けなければならないのだろうか？

1983 年、ソ連軍将校スタニスラフ・ペトロフが任務に就いている際、核早期警戒システムが米国によるミサイル発射を警告した。冷戦の真っ只中であったにもかかわらず、ペトロフは軍規に背き、警報を誤報と判断した。それによって、彼は核戦争を未然に防いだのだ。ペトロフは、その判断が推論（警告を米国の非論理的な行動と評価すること）と同時に、「民間人としての訓練」によってなされたものであることを指摘している。そうした訓練によって、彼はこの警報についてすぐに報告せず、まずはその妥当性を疑うことができたのである。一旦引き下がる、という彼の判断は、まさに文明の存続か滅亡かの境界線であった。

私たちは皆、ペトロフに倣い、核兵器の存在そのものに疑問を投げかけるべきである。意図的であろうとなかろうと、核兵器の必要性を声高に唱えることによって核兵器の拡散を永続させている政策立案者の態度を疑うべきである。核兵器のとてつもない力は、私たちが決して開けてはならなかったブラックボックスである。だが、それを再び閉じることが不可能というわけではない。私たちが、自らが置かれた秩序に疑問を投げかけ、共感をもって進んでいけば、核兵器のない未来にたどり着くことは可能である。